



ヘルギ・トマソン振付『トリオ』でのマリア・コチェトコワ Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

マリア・コチェトコワ インタビュー

サンフランシスコ・バレエ(SFB)のプリンシパルとして活躍するコチェトコワ。デボラ・ワイスがお話をうかがいました。

ワイス(以下DW):あなたはモスクワ舞踊学校の出身ですが、ポリショイで踊ることは考えなかったのですか?

コチェトコワ(以下MK):もちろん、ずっとそれを夢見て育ちましたが、卒業が近づくに連れて、その夢は遠のいていきました。最終学年でローザンヌに出場して英国ロイヤル・バレエの研修生の資格を得たとき、私はすぐにモスクワを離れることを決心したのです。私を引き止める人は誰もいなかったし、背が低いせいでどこからも入団を断られていました。ロシアのバレエ界には情け容赦のないところがあって、私も手酷いことを言われたし、傷口が癒えるには時間もかかりました。だからこそ、帰国してロシアの観客やダンサーに、『白鳥の湖』などとは違う作品での私を観てもらわなくては、私は小さい白鳥を踊るために生まれてきたんじゃないことを証明しなくてはと思ったんです。プリンシパル・ダンサーであるということは、どんな作品でも踊れるということ。難しいものも、より自然で楽なものも、あらゆるスタイルや役をこなせなくてはいけない立場です。11年前に比べるとロシアの状況もずいぶん好転したようだけど、ここに留まっても私は何も変わらなかつたでしょうね。私は、新しい要求にチャレンジすることでこそダンサーとして成長してこられたけど、ロシアにいたら不可能だったと思う。

DW:そしてロイヤルでの研修後は、イングリッシュ・ナショナル・バレエ(ENB)に入団しました。

MK:若くてとにかく踊りたかったのが、公演数の多いENBは最高でした。正しい判断だったと思います。でもそのうち、同じレパートリーの繰り返しに飽きてきました。コンテンポラリーも踊りたい、私のための作品を作ってほしい、前進し続けなくてはと思うようになっていたんですね。そんなときSFBをサドラーズ・ウェルズ劇場で観て、一目で気に入りました。それまではENBを離れるなんて思いもよらなかつたのですが、SFBのダンサーやスタイル、そして作品にすっかり魅了されました。「もし移籍するとしたら、ここが第一候補だ」と思いました。でも実際に移籍してみると、踊ったことのないような作品ばかりで最初は棒立ちでした。来年は芸術監督のヘルギ・トマソンの就任

30周年に当たりますが、私の知る限りこんなに長く一つのカンパニーを率いているのは、ヘルギとジョン・ノイマイヤーだけですね。ヘルギは脚や体型の好みではなく、ダンサーが何を考え、どう踊れるかを重視する人。だからこのダンサーは一人ひとりが個性的だし、すぐれたダンサーであるためには、それが何より大切なんです。動ける団員を多彩に揃えたSFBなら、どんな振付家を連れてきても成功しますよね。私の最初のシーズンは、バレエ団の設立75周年と重なっていたこともあって新作が10もあって本当に大変でした。初演キャストでの出番はなかつたけど、収穫は多かつたです。真剣に求めていたら、身に付くのもすごく早い。私はとにかく吸収したかつたし、実際そうできたと思います。

DW:その後は、次々と新作に起用されてきました。

MK:ちゃんと記録をつけていないのですが、クリストファー・ウィールドンとユリー・ポーソホフの作品が、いちばん多いと思います。私を最初に初演に選んでくれたのがクリス・ウィールドンで、それから最新の『シンデレラ』まで、SFBでの彼の作品には全部出ています。ユリー・ポーソホフも私にたくさん振り付けてくれたし、ウェイン・マグレガーの『ボーダーランズ』も普通じゃない作品で、得るものは大きかつたです。こんな振付家たちと仕事をできるのは、特別なことです。自分の未知の部分を見出し、限界を超えるよう求められますが、それによって新境地に到達できるのを、とことん楽しんでます。

DW:ツイッターのフォロワーが19800人とか。

MK:気がついたらFacebookと両方もそうなっていました! 私がソーシャルメディアを活用しはじめたのは、バレエ・ダンサーの中でもいちばん早いほうなんです。発信は大事だと思うし、楽しんでもらえてるようです。まめにツイートしていますが、これはと思う話題が多くて、いつも書き込んでいる気もします。なるべくバレエ関連の内容に限定していますが、子供や若手ダンサーも大勢フォローしてくれているので、ためになりそうな本や音楽も取り上げています。(訳:長野由紀)